

ロシア革命 ——ブルジョア民主主義革命から社会主義革命へ——

注) 本文と4-34、17-3で「十月革命四周年によせて」の全文。

10月25日(11月7日)の四周年がやってくる。

この偉大な日がわれわれから遠ざかっていけばいくほど、ロシアのプロレタリア革命の意義はますますあきらかになってくるし、われわれは、全体としてみたわれわれの仕事の実際の経験をも、いっそうふかく考える。

この意義とこの経験は、ごく簡単に——だから、もちろん、けっして完全でもなければ正確でもないが、——要約すれば、つぎのように述べることができよう。

ロシアにおける革命の直接、当面の任務は、ブルジョア民主主義的任務であった。すなわち、中世の遺物を打ちたおし、それをすっかり取りのぞき、この野蛮、この恥辱、わが国内のあらゆる文化とあらゆる進歩とにたいするこのもっとも大きなブレーキを、ロシアから一掃することであった。

そしてわれわれには、人民大衆にたいする影響、人民の奥ふかくにおよぼした影響という見地からすれば、125年以上まえにフランス大革命がやったよりも、はるかにきっぱりと、急速に、大胆に、首尾よく、広く、またふかく、この清掃をやりとげたことをほこる権利がある。

ところで無政府主義者も、また小ブルジョア的民主主義者(すなわち、この国際的な社会類型のロシアの代表者としてのメンシェヴィキとエス・エル)も、ブルジョア民主主義革命と社会主義革命(すなわちプロレタリア革命)の関係の問題については、信じられないほど多くの、わけのわからないことを言ってきたし、またいまも言っている。この点でのわれわれのマルクス主義理解の正しさ、従来の諸革命の経験にたいするわれわれの評価の正しさは、この四年間に完全に確証された。われわれは、ブルジョア民主主義革命を、だれもやらなかったほど徹底的に遂行した。われわれは、十分に自覚して、断固として、たゆまず前進しているが、それは、社会主義革命が、ブルジョア民主主義革命から、万里の長城でへだてられているのを知っているからであり、われわれがどれほど前進できるか(結局のところ)、かぎりなく高度な任務のうちどの部分をはたすことになるか、われわれの勝利のうちどの部分を確保することになるかということは、闘争だけが決定することを、知っているからである。それはそのうちにわかるであろう。だがいまでももうわれわれは、——荒廃し、いためつけられた後進国にしては——、社会を社会主義的に改造するうえですこぶる多くのことが成しとげられていることを、みている。

しかし、わが革命のブルジョア民主主義的内容のことは、これで終りにしておこう。マルクス主義者にとっては、これがなにを意味するかは、わかっているはずである。説明のために、はっきりした例を取ってみよう。

革命のブルジョア民主主義的内容とは——国の社会関係、(秩序、制度)から中世を、農奴制を、封建制度を一掃することである。

1917年ごろのロシアにおける農奴制のもっとも主要な現れ、その遺物、その残存物は、どういうものであったか? それは君主制であり、身分制であり、土地所有と土地用益であり、婦人の地位であり、宗教であり、諸民族の圧迫である。こういう「アウギアスの^{うまや}厩」

——ついでに言うておおくが、それはすべての先進国家も、125年、250年、またそれ以上もまえ（イギリスでは1649年）に彼らが**彼らのブルジョア民主主義革命**を遂行するさいかなりの程度に掃きさらすにいたったものである——こういうアウギアスの厩のどの一つでも取って見たまえ。われわれがそういうものをきれいさっぱり掃ってしまったことが、おわかりになろう。1917年10月25日（11月7日）からはじまって憲法制定議会の解散（1918年1月5日）までのせいぜい**10週間**のあいだにわれわれがこの分野でやりとげたことは、ブルジョア民主主義者や自由主義者（カデット）や小ブルジョア民主主義者（メンシェヴィキとエス・エル）が、その権力の**八ヵ月間**にやったことより、千倍も多いのである。

こういう臆病もの、おしゃべり屋、うぬぼれの強いナルキッソスや小ハムレットは、厚紙たちの剣をふりまわしていたが、彼らは君主制さえ絶滅しなかったのだ！ われわれは、これまでだれもやったことがないほどに、君主制の屑をすつかりはたきだしてしまった。われわれは、身分制という年経た建物を、根本からくつがえしてしまった（イギリス、フランス、ドイツのようなもっとも先進的な国々でさえ、いまでも身分制の痕跡をぬぐいさっていないのだ！）。身分制のもっとも深い根、すなわち、土地所有における封建制度と農奴制との残存物は、われわれによって根こそぎひきぬかれてしまった。十月大革命の土地改革は「結局」どういふ結果になるか、ということについて「論争するもよかろう」（外国にはこういう論争にふける文筆家や、カデットや、メンシェヴィキや、エス・エルがたくさんいる）。だがわれわれは、いまそういう論争に暇つぶしをしたくない。というのは、われわれは、この論争や、これにかかりあっている多くの論争全体を、闘争によって解決するからである。しかし、小ブルジョア的民主主義者は、農奴制の伝統をたもっている地主と、八ヵ月も「協調していた」が、われわれは数週間のうちに、これらの地主も彼らの伝統もすべてロシアの地上からすつかり掃ってしまった、という事実には、反対論をとなえることはできない。

宗教なり、婦人の無権利なり、あるいは非ロシア諸民族にたいする圧迫や不平等なりを取って見たまえ。これはすべてブルジョア民主主義革命の諸問題である。小ブルジョアの民主主義派の俗物どもは、八ヵ月もこれについてしゃべっていた。だが**これらの問題がブルジョア民主主義的な方向で徹底的に解決された**ような国は、世界のもっとも先進的な国々のうちにさえ**一国**もない。わが国では、これらの問題は、十月革命の立法措置によって徹底的に解決されている。われわれは宗教と真剣にたたかってきたし、現にたたかっている。われわれは、**すべての非ロシア民族に彼ら自身の共和国あるいは自治州**をあたえた。わがロシアには、婦人の無権利とか不完全な権利とかいうような、下劣なこと、忌まわしいこと、卑しいことはない。食欲なブルジョアジーやおびえた愚かな小ブルジョアジーによって、例外なく地球上のすべての国で更新された、こういう農奴制や中世の遺物はない。

すべてこういうものが、ブルジョア民主主義革命の内容である。150年から250年まえには、この革命（一つの一般的類型の民族的な各変種を問題とすれば、これらの革命）の先進的指導者たちは、中世の特権から、婦人の不平等から、ある一つの宗教（あるいは「宗教思想」、「宗教心」一般）の国家的特典から、諸民族の不平等から人類を解放することを、人民に約束した。約束はしたが、それをはたさなかった。はたすことができなかったのである。なぜなら、「神聖な私的所有」にたいする……「尊敬の念」がそれを妨げたか

らである。わがプロレタリア革命には、あくまでも忌まいましたこの中世とこの「神聖な私的所有」とにたいする、この忌まいました「尊敬の念」というものがなかった。

しかし、ブルジョア民主主義革命の成果をロシアの諸民族のものとして確保するために、われわれはさらに前進しなければならなかったし、またわれわれはさらに前進した。われわれは、ブルジョア民主主義革命の諸問題を、われわれの主要な、ほんとうの、**プロレタリア革命的な、社会主義的な活動の「副産物」として、通りすがりに、このついでに、**解決してしまった。改良は革命的な階級闘争の副産物である、とわれわれはつねに言ってきた。ブルジョア民主主義的な改造は、プロレタリア的、すなわち社会主義的な革命の副産物である、——われわれはそう言ってきたし、事実によってそれを証明した。ついでに言うておくがカウツキーとか、ヒルファディングとか、マルトフとか、チェルノフとか、ヒルキットとか、ロンゲとか、マクドナルドとか、トゥラティとかいう連中や、その他「第二半」マルクス主義の英維たちはみな、ブルジョア民主主義革命とプロレタリア社会主義革命との**このような相互関係を理解できなかつたのである**。前者は後者に成長転化する。後者は前者の諸問題をこのついでに解決する。後者は前者の事業を打ちかためる。後者がどれだけ前者を越えて成長することができるかは、闘争が、ただ闘争だけが決定する。

ソヴェト体制は、このように一革命が他の革命に成長転化することを明瞭に確証するもの、あるいはその現れの一つにほかならない。ソヴェト体制は、労働者と農民のための民主主義の極致である。それと同時に、それは、**ブルジョア民主主義との断絶を意味し、民主主義の世界史的な新しい型の発生を、すなわち、プロレタリア民主主義あるいはプロレタリアートの独裁の発生を意味する**。

われわれのソヴェト体制をわれわれが建設するさいの失敗や誤りにたいして、瀕死のブルジョアジーやその尻馬にのった小ブルジョア的民主主義派の犬や豚どもが、悪口、雑言、嘲笑をさんざん浴びせかけるなら、そうさせておくがよい。われわれが失敗や誤りを実際にたくさんやったし、いまもたくさんやっていることを、われわれは、かたときも忘れてはいない。これまでかつてなかつた**型**の国家機構をつくりだすというこういう、新しい、世界史全体にとって新しい仕事をするのに、失敗や誤りをしないでやっていくことなど、どうしてできよう！ われわれは、われわれの失敗や誤りを是正するために、そしてソヴェト的諸原則を生活に適用する——それはまだまだ完成にはきわめて遠いが——というわれわれの仕事を改善するために、うまずたゆまずたたかっている。だが、ソヴェト国家の建設をはじめ、それによって世界史の新時代、**新しい階級の支配の時代をひらく**という幸運に浴するめぐりあわせになったことを、われわれはほこる権利があるし、またそれを誇りとしている。ところでこの新しい階級は、すべての資本主義国でしいたげられながらも、どこでも新しい生活にむかって、ブルジョアジーにたいする勝利にむかって、プロレタリアートの独裁にむかって、人類を資本のくびきから、また帝国主義戦争から救いだす方向にむかって、すすんでいるのである。 注) ……は本文中の略

第 33 卷「十月革命四周年によせて」 P37-41

1921 年 10 月 14 日